

源氏物語胡蝶の巻

中宮御読経の条私註

久保重

はじめにこの小論の対照とする部分の本文を掲げる。

「今日は、中宮の御読経のはじめなりけり。やがて罷で給はで、やすみ所とりつつ、日の御装にかへ給ふ人々も多かり。障あるは罷でなどもし給ふ。午の時ばかりに皆あなたに参り給ふ。大臣の君をはじめ奉りて、皆著きわたり給ふ。殿上人なども残るなく参る。多くは大臣の御勢にもてなされ給ひて、やむごとくいくしき御有様なり。春の上の御志に、仏に花奉らせ給ふ。鳥蝶にさうぞきわけたる童べ八人、容貌などことに整へさせ給ひて、鳥には、銀の花瓶に桜をさし、蝶には、金の瓶に山吹を、同じき花の房殿しう、世になき匂をつくさせ給へり。南の御前の山際より漕ぎ出でて、御前に出づる程、風吹きて、瓶の桜すこしうち散り紛ふ。いとうらかに暗れて、霞の間より立ち出でたるは、いとあはれになまめきて見ゆ。わざと平張なども移されず、御前に渡れる廊を、楽屋の様にして、飯に胡床どもを召したり。童ども御階のもとに寄りて、花ども奉

る。行香の人々とりつぎて、闕伽に加へさせ給ふ。御消息、殿の中將の君して聞え給へり。

花ぞののこてふをさへや下草に秋まつむしはうとく見るらむ宮、かの紅葉の御返なりけり、とほほゑみて御覽す。昨日の女房達も、げに春の色はえおとさせ給ふまじかりけり、と花に折れつつ聞え合へり。鶯のうららかなる音に、鳥の樂はなやかに聞きわたされて、池の水鳥もそこはかとなく轉りわたるに、急になりはつるほど、飽かず面白し。蝶はまして、はかなき様に飛びたちて、山吹のませのもとに、咲きこぼれたる花の蔭に舞ひ入る。

宮の亮をはじめて、さるべき上人ども、祿とりつつきて、童に賜ぶ。鳥には桜の細長、蝶には山吹襲賜はる。かねてしも取りあへたるやうなり。物の師どもは、白きひとかさね、腰差など、つぎつぎに賜ふ。中將の君には、藤の細長添へて、女の装束かづけ給ふ。御返、

昨日は音に泣きぬべくこそは、

こてふにもさそはれなまし心ありて八重山吹をへだてざりせばとぞありける。(胡蝶)

《季ノ御説経と鳥・蝶——本文に即して》

(一) 御　　ど　　経

穂久邇文庫本「きのみときやう」。「河海抄」の本文も「きの御どきやう」とあって、これに「季御説経とは春秋ニ内裏にて大般若を講説せらるゝ也引茶とて僧に茶をひかるゝ也中宮春宮これにおなし」と注している。「みと経」とある本文も、諸注みなこれを「季ノ御説経」と見ている。源氏物語に「季ノ御説経」と解釈されている仏事は三例を見る。その中の二例は中宮が里第で修しているもので、一例は「胡蝶」ノ巻に秋好々中宮が六条院で行い、他の一例は明石ノ中宮が二条ノ院の東ノ対で行っている。後者の本文は極く短い。

「御説経などによりてぞ、例のわが御かたに渡り給ふ。」(御法)これを「河海抄」に「中宮季御説経」と注し、「花鳥余情」も「我御方とは東ノ対也。そなたにして季ノ御説経の事をおこなはるる也。」と云い、諸註みな季御説経と解して疑っていない。

季御説経は、元来天皇が春秋二季に大極殿(後には紫宸殿)に於いて百僧を請じて三日(後には四日)間大般若經を講説せしめられる仏事である。東宮中宮でも行なわれた。後には摂関の私第でも行なう様になったが、小野宮実頼は「小右記」寛仁三年六月廿四日の記に「摂政御説経季御説経、(二十口)帳中安置仏、如帝王儀、

未聞見之事也、」と憤つて記している。「中宮季御説経」は天皇の御儀に準じる非常に重い行事であり、中宮が禁中以外の所て之を行うことは、後に記す通り異例のことであつた。

「中宮季御説経」についての規定や故実を載せた記録はない。いわゆる「公事」でなかったからだろう。そこで天皇の季御説経に就いての記載を見ることにする。「延喜式」には「二月八日・三吉日・請三百僧於大極殿。三箇日修之。」とある。「西宮記」には「天慶九年八月、於大極殿、有季御説経、依南殿内論義也。」「延喜八、二、廿六、季御説経、南殿六十口大般若、廿口仁王經、御前」「天徳四、六月有百口御説経、不依寺分己講、召智徳淨行」と見えている。僧の数は年によつて必ずしも百口ではなかった。

「江家次第」第五に「季御説経事。春秋二季請百僧。於南殿説大般若經。其内定御前僧廿口。於御殿説仁王經。納言參議。各一人着南殿行事。自余皆候。貞觀御時。每季行之。元慶天皇踐祚之後。二季修之。(略)」とある。以下長文の引用を避けて「西宮記」「江家次第」に基づいて概況を記すと、予め、上卿が仰せを受けて陣に着いて、招請僧(南都七大寺・東寺・西寺・延暦寺をはじめ諸大寺の僧綱・大威儀師・三会已講)の名を定め、陰陽寮に発願・結願の日を勘申させた文を副えて奏上し、外記には堂童子(「西宮記」云

「五位四人。若有闕用三四位」。可用三六位之由。在藏人職。云々)を出させる。内膳には仏供を、大膳・内藏・穀倉院・大炊等には僧供を、木工・修理職・掃部・大藏等には僧房を、左近右近には時花を準備させた。その他、仏前に焚く香、第二日に僧に賜う

引茶の料の茶（当時貴重品であつた）を用意させる。正月の御齋会に次ぐ大法会で、その費用もまた莫大であつた。

本尊は毘盧舍那仏である。堂内の設営は延喜式卷十三に

「春秋二季御読経ノ装束

盧舍那仏并脇侍ノ菩薩像一龕。墨字ノ大般若經一部。白銅火爐三

口。白銅ノ廬八合。七十六枚。金銅ノ花盤二口。盛花鉄磬一枚。金銅

ノ鐘一口。金銅大花瓶二口。幡五十二流。大四十流。小八流。花蔓代三十枚。

大二十枚。緋ノ綱十一条。赤漆ノ小机百脚。料各赤添ノ鸞脚ノ円机二脚。

立大花。案七脚。一香花。一仏供。二散花。二行香。聖僧一座一具。礼版座二具。仏

布施細屯ノ綿十屯。大藏省包緑帛。結願日進之。寮官人置。高案。立二仏前。

と見える。

着座の有様は「西宮記」に「（略）御仏安三御帳中。御帳東西設二

聖僧座。其西南少退敷僧綱座。座南座東敷二凡僧座。北御障子

下眼御帳下皆敷僧座。南座東端。威儀師候前。居聖仏前間。

別三敷御導師座。或東庇。衆僧座中御導師候。東庇南北敷堂童子

座。近代南座敷出居座前。殿上東戸前也。」とある。

当日は上卿以下着陣、剋限が至ると上卿が行事弁に鐘を撞かせる。以下進行次第は次の通りである。

左右出居昇、

王卿参入上、

衆僧参入、

從儀師差御導師法用、御導師着、堂童子着座

唄二段、分花僧、左右各十人、居南庇、（下廊）

堂童子散筥（昇自南階、入自中央間分花筥、歸着本座之衆僧行道了、堂童子昇取筥置、

啓白教化、読経、作法等了、立復本座

咒願（出自西）三礼（出自東）

左右行香

咒願三礼了、從儀師跪仏前、

差御導師等（出自西方、差夕座、初夜、半夜、宸朝、明日、朝

座、御導師法用等）僧等降出居下、王卿着陣饗（「西宮記」——

原典に細字書の部分を（ ）内におさめた。以下同じ）

「江家次第」にはやゝ委しく

王卿参上御前。

左右近次將着二南殿簀子敷座。昇自二東西ノ階。但左將者出

自二本陣。經二宜陽殿ノ西ノ砌二並二軒廊。次二納言参議各一人着二南殿。

次二僧侶参上。（僧綱從僧二人童子一人。凡僧各一人。（略））

座定差二定法用。座定差二定法用。座定差二定法用。座定差二定法用。

御導師着。從僧先敷二座具二置二香爐之筥。

諸僧給礼三度。

堂童子着座。（図書為先。）

唄二段。打レ磬（王卿置笏。）

分花ノ僧左右各十人。（散花僧在西ノ一。居二南廂。

堂童子昇。（自二南階二入二中央間。散二花筥二兩復座。）

衆僧行道畢。唄（不起。）堂童子昇納二花筥退。

次將仰_二御願趣_一。(徑_二東階_一入_レ自_二南廂_一。先居_二上卿前_一。仰_レ之。隨_二其所_一。分_レ就_二導師柱辺_一。仰_レ之。或必不_レ仰_レ之。臨時ノ御誂経時必仰_レ之。(略)

次_二啓白_一。教化。誂経作法等畢。

導師復座。(從僧取_二座具_一)

咒願。(出_レ自_二西_一)三礼。(出_レ自_二東_一)着。(略)置笏。

左王卿。左右行香。右侍從。

先順三礼(西者咒願出。)之後。行_二東西第一行僧_一。(不_レ行_二自余僧_一。圖書官人取_二火蛇_一相隨。)

王卿復座。

從儀師跪_二仏前_一。

差_二御導師等_一。(出_レ自_二西方_一着之。夕座初夜半夜宸朝明日朝座等御導師也。)

僧等退下。王卿退下。出居下。王卿着陣饗。(近時不着。)

とある。

中宮の季ノ御誂経はずと小規模であろう。「貞信公記」延長二年九月十八日に「中宮御誂経始甘僧」と見える。

以上によつて状況の概略を兎も角も推知することが出来るであらう。天皇の季御誂経は二月と八月、期日は四日間のためで、中宮・春宮・院・女院のも、之に準じる。実例について見ると、月はその年によつて必ずしも一定していない。中宮季誂経の例は後に記すが、正月と神事ノ月以外はどの月にも行なわれている。「三月廿日あまり」という日を特に選んだのは、作者のフィクションである。

源氏物語では法会は華麗なものとして描かれている。就中、中宮季御誂経に最もふさわしい華麗な背景を、特に六条院の爛漫の春に求めたのである。

(二)、大臣の君をはじめ奉りて

中宮御誂経の際に王卿は参列しない例であつた。「御堂関白記」寛弘二年十月十一日の記事に「中宮御誂経結願。被_マ右府。内府自余公卿八九人許。女宮御誂経。参大臣。甚以希有事也。此宮度々有此事云々。」と道長が喜んで書き記している。彰子中宮のこの時の御誂経は禁中で行なわれたと解される。(註18) 秋好中宮は里第で催した。而かも、「親王達、上達部などあまた」と書かれた船の楽の日の客がずらりと着席し、殿上人が悉く参上するのは、源氏の威勢によるのだ。源氏をはじめ王卿上達部殿上人達が日の装(束帯)で居並んだ盛観は、中宮季御誂経としては破格の尊厳な御有様だといふのである。

(三)、鳥蝶にさうぞきわたる童べ八人容貌などことに整へさせ給ひて

鳥は雅楽の迦陵頻、蝶は雅楽の胡蝶。迦陵頻は左舞、林邑楽、沙汰調。四人舞の童舞である。舞人は背に鳥の翼の作り物をつけ、天冠を着け、頭の左右に桜花の小枝を飾る。手に銅拍子を持って之を打ちながら舞う。胡蝶は右舞。高麗楽、高麗宅越調。四人舞の童舞

で迎陵頻と番舞である。舞人は背に蝶の翅の作り物をつけ、天冠を着け、手に山吹の花枝を持って舞う。

迎陵頻の装束を着けた童四人、胡蝶の装束を着けた童四人、育しく美貌の童をお揃えなさって（主語は紫ノ上）の意。

四、鳥には銀の瓶に桜をさし蝶には金の瓶に山吹を

迎陵頻の装束をつけた童四人には銀の瓶に桜の花枝を挿して持たせ、胡蝶の装束をつけた童四人には金の瓶に山吹の花枝を挿して持たせ、の意。「山吹を」の下「挿し」を省略。迎陵頻と桜、胡蝶と山吹の取り合わせは上記で明かであるが、童達が捧げている瓶は雅楽の常道から云えば、左舞が金、右舞が銀を持つべきである。それを反対に設定したのは花の色との調和を重んじたのであらう。常道を超えた作者の美的選択である。早く河海抄も「花がめの色は、花の色にしたがひて、こがねしろがねにとのへたるなり」と註している。

五、御前に渡れる廊を楽屋の様にして

「花鳥余情」に「両方の中門の廊を左右の楽屋にしたる也」と解しているのは流石にいゝ感覚だと思う。寝殿を中央に見て、左右の中門の廊の寝殿寄りの部分が、それぞれ左方の楽屋右方の楽屋に充てられている。本式に楽舎を設けた昨日の船ノ楽の際とは異なり、仮の楽屋ではあるが、物の師達の衣裳の色、楽器の色彩が左方は赤・紫・金色、右方は緑・黄・銀色で一目でそれとわかる楽屋。舞台

は寝殿の御前の庭。そのまゝ絵になる一場面である。

六、童ども御階のもとに寄りて花ども奉る。行香の人々とりつぎて關伽に加へさせ給ふ

迎陵頻四人、胡蝶四人が歩み進んで南階の下に二列に立ち、（參照六）それぞれ手にした花を捧げる。行香の左方（王卿四人）、右方（侍従四人）が階を降りて来て八人の童の手から花瓶を受け取る。その花は、もともと供えてある關伽のところに並べ加えて仏に供えさせられる。（「加えさせ給ふ」の主語は中宮）。「童ども」。「花ども」とこのところ複数形の効果がよく利いて、視覚的な巧みな表現になっている。

説経が了って、今日の儀式は主要部分は完了した（「春記」には「事畢行香」又は「説経畢行香」という記事が屢々見える）。「左右行香」の時に、供花の童たちが到来した。計算されたいタイミングである。行香は左廻り王卿四人、右廻り侍従四人が、それぞれ台に香爐と香を載せて僧の間を廻る。僧は承香―その香をつまんで香爐に焚く。（行香の作法は異本紫明抄に委しい。）その本旨は三宝帰依の心を表わすのにあり、「帳江入楚」の箋には「唐には天子も香を行し給有」とある。敬虔莊嚴な重い用である。行香の人々が取次いだので紫上の供花は更に劇的な華やかさを御儀に加えて、中宮春季御説経発願の法会の中に位置を占めることとなった。

(四) 花に折れつつ

「花」は紫上から奉った瓶の花、上に「同じき花の房厳しう、世になき匂をつくさせ給へり」とあつた桜と山吹。折れつつは「花鳥余情」に「情をおりたるなり」、「岷江入楚」秘抄に「情を折なり。面白きかきざまなり。」とあるのを採る。上に「ものめでしぬべき」と書かれていた女房達は、今奉られた花の見事さに感嘆し合つて——紫上自ら花園と誇る庭の、桜と山吹の美しさ。これこそまさに春ノ色そのものと宮廷女房的発想で感動し合つた。昨秋以来の春秋の争の意地と張りとを捨てたのである。(紫ノ上と中宮の春秋の争いに、両方の女房達はご主君以上に力を入れて張り合つて来たことだろう。)

(六) 鳥の楽はなやかに聞きわたされて

迦陵頻の楽が始つた。広いお庭にもご殿の人々にも、その明るい華麗な楽声が響き渡る。下に「蝶は……舞ひ入る。」とあるから、迦陵頻も楽だけでなく舞をも奏したと解するべきである。童達は舞童だったのだ。「花鳥余情」に「花瓶もちたるわらはの、則、鳥蝶の舞人なるべき歟。一勘、わらはは則鳥蝶の舞人なり。是は今の世にもある事なり。」と云い、「河海抄は「法会儀蝶鳥供花定事也。迦陵頻胡蝶菩薩或先菩薩」と云う。仏事に菩薩・鳥・蝶の舞が奏せられること(菩薩だけは早く行なわれなくなつたが)、その舞に先立つて舞人が、左鳥の舞右蝶の舞中央階の下に二行に立つて(「教

訓抄」)花を捧げることは、法会には定つて行なわれて来たことであつた。四季の花が咲き満ち、迦陵頻伽が囀り、胡蝶が舞い遊び、菩薩達が樂しげに仏を供養していると聞き及ぶ、極楽世界の光景をさながらに演じて、この日の仏の供養としたのである。

「江家次第」卷十三に

「迦陵頻八人、胡蝶八人、菩薩十六人、(各擎^二供花^一、二行相分経^二舞台上^一、列^二立壇下^一、伝^三供導師咒願十弟子等^一、伝供之後樂止

次迦陵頻、胡蝶、退着三舞台上草墩、菩薩留三舞台上^二而発^三菩薩樂^一、舞退入、次迦陵頻、胡蝶等舞畢退帰、」(興福寺供養)とある。

季御説経の次第には供花や舞は付いていなかった。後に挙げた中宮季御説経の実例の記録の中にも、舞についての記載は全く見えない。「江家次第」に見たのも「興福寺供養」の際の記録であり、同書中の「法勝寺御塔会次第」も之と大略似ている。この場に鳥と蝶を登場させ、花を供え舞を舞わせたのは、全部「紫ノ上の御志」であつた。上に「平張なども移されず、御前に渡れる廊を楽屋の様にして、仮に胡床ども召したり」とあつたのも、本来季御説経には楽や舞は付かないからである。

とすると、紫上の奉る花を、まるで本当に極楽世界から迦陵頻伽と胡蝶が供花に來た様に仕立て、舟にのせて霞の間から出現させた部分が、趣向の中心で、これに舞を舞はせたのは趣向上からは従と

なる。

(九)、急になりはつる程

「教訓抄」に

「迦陵頻 童舞 古楽（略）」

序 二帖（拍子八）

破 三帖（拍子十六、以二返為一帖、常一帖十、末六拍子加拍子）

急 （拍子八、度数無定、隨舞加拍子）とある。楽と舞が急の拍子に転じ、そのうちに終末の部分を奏する時分の意。押さえ所を心得た作者の鑑賞力が利いて、派手なリズムカルな躍動美を写し得ている。楽人も舞童も特に技に長じた人達が選ばれていたのだ。

(十)、蝶はまして、はかなきさまに飛び立ちて

古注の諸説の、論の別れる個所であるが、蝶が胡蝶の舞人であることが分明すると、わかり易い。「まして」は「まして面白し。」と解したい。従って「蝶はまして。」と句を読み切る。

「教訓抄」に

「胡蝶

破 （拍子十二、五返）

急 （拍子十二）」

とある。序を欠く小曲である。「はかなきさまに」は小曲の童舞の可憐美を云い得て妙である。

(十一)、舞ひ入る

まひいつる（三条西実隆本）まひいる（穂久邇文庫本）まひいるに（書陵部蔵後陽成院（等）本・山岸本・青蓮院本）

「舞ひ入る」には小曲の美しさが見られる。「舞ひいづる」は舞い出たさまの美しさを言ひ得ている。この作者は、舞いの出と入りとを特に賞美する。この場合は出入いずれに見ても無理はないが、すぐ上の文との続き具合は「舞ひ入る」の方が穏かであろう。

(十二)、宮の亮をはじめてさるべき上人ども祿とりつつきて

「中宮季御説経」は中宮職の担当である。

春の日はまだ暮れない。舞人楽人への賜祿がまた一場面の見物である。「かねてしも取りあへたるやうなり。」鳥と桜、蝶と山吹の取り合せは上に見た通りであるが、祿を賜る場面の、色彩の調和の美しさを描いているのを見逃せない。法会の際であるから、舞童は男童であろう。男にも女にも祿に女装束を賜るのは常のことである。御消息の使の夕霧には中宮の御返書と祿が下される。御説経関係の僧俗への布施や祿は第四日目の結願の日に賜わる。

(十三)、昨日は音に泣きぬべくこそは

「河海抄」に「わがその、梅のはつえに鶯の音に鳴きぬべき恋もする哉古今」と引歌を挙げているのを採りたい、紫上の歌の「胡蝶」に「鳥」を踏んで応えたと見る。「昨日はそちらの面白い御遊に、私は行って見たくて音になくばかりでした。」の意。

《中宮季御説経の歴史》

「弄花抄」に「六条院にてありと見ゆ 有例敷。」と注している。秋好中宮は六条院出御の間にも身分上の制約を守って、源氏も中宮のその意志を尊重している。このことは上に

「中宮この頃里におはします。かの春まつ園とはげまし聞え給へりし御返もこの頃やと思し、大臣の君も、いかでこの花の折、御覽ぜさせむと思し宣へど、ついでなくて軽らかにはひわたり、花をもてあそび給ふべきならねば、」と作者が説明している。その中宮が恣に「中宮季御説経」を里第で行なう筈がない。定めし先例があるかと「弄花抄」は云うのであろう。

もともと源氏物語はフィクションである。「胡蝶」の巻の中宮御説経も勿論フィクションである。然し、この宮廷行事が里第で行なわれた史実がないのに、作者が虚構したのか否かは、作品理解の上に大きな関係のあることである。私は古註とは又異なった視点から史実調査の必要を感じた。そして宇多天皇践祚の仁和三年八月廿六

(第一表)

(天皇)	(年)	月	日	(西暦)	(事)	項	(皇后名)	(行なわれた場所)	(出典)
醍醐	延長四、	三、	二五	926	中宮季御説経始		藤原隠子	貞信公記抄	
円融	永観元、	七、	一七	983	中宮季御説経始		藤原遵子	小右記目錄	

日から、中宮彰子が皇太后となった三条天皇の長和元年二月十四日までの、「中宮季御説経」の実例を、「大日本史料」・「日本紀略」・「貞信公記」・「小右記」・「御堂関白記」・「権記」について索ねた結果、次の二事実を見出すことが出来た。

(天皇) (年月日) (事項) (中宮) (里第)

一条 寛弘三、二、三 中宮御説経始 藤原彰子 左大臣道長

〃 〃 三、二〇 〃 結願 藤原彰子 上東門第

一条 寛弘六、三、二〇 中宮御説経始 藤原彰子 左大臣道長

〃 〃 三、三〇 〃 結願 藤原彰子 上東門第

なお、上記の調査によって得た中宮季御説経の実例を悉く表示すると次の通りである。

第一表は「中宮季御説経」と明かに記されているもの
 第二表は「中宮御説経」と記されているが、季御説経と推定されるもの
 「御説経の行なわれた場所」を推定するに当って根拠としたところは注に記した。

次に、単に「中宮御説経」と記されてあるが季御説経かと思われるものを掲げると

円融	永観元、七、二〇	983	中宮季御説経結願	藤原遵子	小右記目録
花山	〃 二、一二、一九	984	中宮秋季御説経	〃	〃
〃	〃 〃 〃 二二	〃	結願	〃	小右記
一条	寛和元、六、二九	985	中宮季御説経始	〃	小右記
〃	〃 二、一〇、二四	986	中宮春季御説経発願	〃	小右記目録
〃	〃 〃 一二、一七	〃	中宮秋季御説経発願	〃	〃
〃	永延二、一〇、二五	988	中宮春季御説経発願	〃	〃
〃	〃 二、一二、一八	〃	中宮秋季御説経発願	〃	〃
〃	長徳元、一〇、二四	995	宮季御説経発願	藤原定子	〃
〃	長保二、四、二〇	1000	宮季御説経初	(注1)	〃
〃	〃 〃 〃 二三	〃	宮御説経結願 (註2)	藤原彰子	御堂関白記
〃	寛弘元、閏九、二九	1004	中宮季御説経初	禁中 (註3)	〃
〃	〃 四、一〇、一〇	〃	中宮秋季御説経発願 (註4)	〃	〃
〃	〃 〃 〃 一四	1007	結願 (註5)	禁中	小右記目録
三条	〃 八、一二、一九	1011	中宮秋季御説経結願	中宮御所(枇杷殿) (註6)	権記
〃	〃 〃 〃 二二	〃	中宮御説経結願	〃	〃

(第二表)

(天皇)	(年 月 日)	(西曆)	(事 項)	(皇后 名)	(行なわれた場所)	(出典)
醍醐	延長二、九、一八	924	中宮御読経始	藤原穩子		貞信公記
〃	〃 三、一五	925	〃	〃		〃
〃	〃 五、二六	927	〃	〃		〃
一条	永祚元、三、一九	989	中宮御読経	藤原遵子		小右記
〃	正暦四、閏一〇、六	993	〃	〃		〃
〃	長徳三、一一、九	997	皇后宮御読経結願	〃		〃
〃	長保元、一〇、二八	999	皇后宮御読経	〃		〃
〃	〃 二、二〇	1000	中宮御読経発願	藤原彰子	禁中(注7)	権記
〃	〃 〃 二三	〃	〃 結願	〃		〃
〃	〃 〃 一八	〃	御読経結願	〃	禁中(注8)	〃
〃	〃 三、二八	1001	中將 ^{マツ} 御読経始	〃	〃(注9)	〃
〃	〃 〃 二	〃	中宮御読経結願	〃		〃
〃	〃 三、一〇、二一	〃	中宮御読経始	〃	上東門第(注10)	〃
〃	〃 〃 二四	〃	〃 結願	〃		〃
〃	〃 四、三、一三	1002	中宮御読経始	〃	禁中(注11)	〃
〃	〃 〃 一六	〃	〃 結願	〃		〃

一條	長保四、九、一五	中宮御説經始	藤原彰子	禁中（注12）	權記
〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	五、三、一九	中宮御説經始	〃	禁中（注13）	〃
〃	一二、一八	〃	〃	禁中（注14）	〃
〃	六、四、二七	中宮御説經始	〃	禁中（注15）	御堂関白記・權記
〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	寛弘元、閏九、二九	中宮御説經始	〃	禁中（注16）	權記
〃	二、六、一七	〃	〃	禁中（注17）	小右記・權記
〃	〃	中宮御説經始	〃	禁中（注18）	御堂関白記・權記
〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	三、五、八	中宮御説經結願	〃	禁中（注19）	權記
〃	〃	〃	〃	禁中（注20）	〃
〃	一、二、二七	中宮御説經結願	〃	禁中（注21）	御堂関白記・權記
〃	四、五、八	〃	〃	禁中（注22）	御堂関白記
〃	五、三、一七	中宮御説經初	〃	禁中（注23）	權記
〃	六、三、二六	〃	〃	〃	〃
〃	〃	中宮御説經始	〃	上東門第（注24）	御堂関白記・權記
〃	一二、二〇	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	七、三、二二	中宮御説經始	〃	禁中（注25）	權記
〃	八、三、二七	中宮御説經	〃	禁中（注26）	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃

注1

(穩子中宮・遵子中宮については里第出御の記録を見出し得なかった。よって「行なわれた場所」は暫く空欄のままとする。)

「権記」長徳元年十月に「七日 (略) 参中宮、御説経始」、

「十日 (略) 中宮御説経結願、^{参梅}女院中宮出給、自明日有

斎也」、「日本紀略」同年同月に「十日癸未。今夜。中宮^(定)

遷^二御職曹司^一。依石清水行幸間也。」、「廿一日甲午。石清水

行幸。(略)」、「廿二日乙未。天皇還御」とある。十月廿四日

の中宮の所在は記載した書を見ない。よって「行なわれた場所」はこれも亦空欄のままおく。

なお上記長徳元年十月七日、十日の「中宮御説経」については、この年四月十日関白道隆薨去の後、中宮が月毎に十日に仏事を修している(枕草子)ので、季御説経と解することを差扣えた。

注2

「御堂関白記」長保二年四月に「廿日。丁卯。宮季御説経初」。「廿三日。庚午。宮御説経結願」とある。廿三日が、廿日発願の季御説経の結願であることは明かである。以下も之にならう。

なお「御堂関白記」同年同月に「七日。甲寅。(略)戌時天晴月明。亥時宮入給。依御物忌御所上給。男女可然人人。被加一階。」とあり、「権記」同年五月に「廿八日甲辰(略)戌剋中宮出御土御門院、行啓事平中納言行之(略)」とある。四月廿日、廿三日の中宮季御説経は禁中行なわれたと解することが出来る。

注3

「御堂関白記」長保六年閏九月に「廿九日。庚辰。中宮季御説経初。参内。奉和先日所給寂昭房奉和御製。有大内作文事。

(略)」とあり、「権記」に「廿九日 参中宮。御説経始也。^(参梅)此於御前有作文事(略)」とある。禁中と解される。

注4

註5 「日本紀略」・「御堂関白記」・「権記」共にこの年、中宮里第出御の記事を見ない。「御堂関白記」・「権記」にこの時の中宮御説経の記事はない。

注6

「権記」寛弘八年十二月に「十九日戊午 皇太后宮・中宮・秋季御説経結願也、(略)「廿二日辛酉 参皇太后宮、季御説経結願也、参内、中宮御説経結願云々、(略)」とある。十九日の「結願」は「発願」の誤である。

「日本紀略」三条天皇の寛弘八年六月に「廿二日甲子。午剋。太上法皇^(一冬)崩^三于一条院中殿^一。同年十月に「十

六日乙卯。天皇即位於^三大極殿^一。今夜。東宮自^三一条院^一遷^二御凝華舍^一。中宮(彰子)遷^二御枇杷殿^一。」とあるので枇杷殿中宮御所に於て行なわれたと解される。

注7

「権記」長保二年四月に「廿三日参内、中宮御説経結願也(後略)」とある。

注8

「権記」長保二年十二月に「十八日参内、(略)次参藤壺、御説経結願」とある。

注9

「権記」長保三年三月に「廿八日法用之後参内、御説経結願、及秉燭、又中將御説経始也」とある。禁中と解される。

注10

「日本紀略」長保三年十月に「九日丙午。於^三土御門第二^一有^二

東三条院四十御賀^一。仍天皇行幸。中宮(彰子)行啓。令三侍臣奏^レ舞。同十一月に「七日甲戌。中宮(彰子)御^三内裏^二」と見える。「権記」長保三年十月に「廿四日辛酉 与右衛門督候左府御車後參中宮、御誂経結願也、事了於馬場有覽馬事、了歸家」とある。中宮滞在中に左大臣道長の上東門第で行なわれたこと明かである。

注11 「日本紀略」長保三年十一月に「廿二日己丑。天皇自^三職曹司^二行幸^一」一条院。中宮自^三上東門^二第二行啓^一一条院^一。(略)(筆者注 同月十八日内裏焼亡)と見え、その後行啓の記事がないので、「権記」長保四年三月に「十三日乙酉參中宮、御誂経始也」、「十六日壬子參衙之間、剋限已移、仍參中宮、御誂経結願也、左大弁宰相中将同參会、事訖詣左府(略)」とあるのを禁中(一条院)と解した。

注12 「権記」長保四年九月に「十五日丁未參衙、(略)、結政了同入内、中宮御誂経始、右大臣被參、仍參御前(略)」とある。禁中と解される。

注13 「権記」長保五年三月に「十九日参内、有陣定、先參中宮御誂経始」とある。禁中と解される。

注14 「日本紀略」長保五年十月に「八日甲子。天皇自^三一条院^二遷幸^一新造内裏。中宮(彰子)東宮同入御。」とあり、年内中宮行啓の記事がない。よって、「権記」同年十二月に「十八日癸酉御誂経結願也。左大臣候御前、(略)中宮御誂経始也、(略)歸家一寝之後亦参内、(略)」とあるのを禁中と解した。

注15 「権記」長保六年四月に「廿七日(略)了入内、參殿上、中宮御誂経始也、(略)仍更參御前、被仰雜事、良久後亦參宮」とあるので禁中と解される。

注16 「権記」寛弘元年閏九月に「廿九日、參中宮、御誂経始也、此^(脱字)於御前有作文事」とあるのを禁中と解してよからう。この日「御堂関白記」には上掲の如く「季御誂経」と記されて、同様の記事がある。

注17 「小右記」寛弘二年六月に「十七日参内、次參中宮御誂経、^(飛香)右大臣、内大臣、中納言齊信、俊賢、隆家、參議有国、懷^(平家)輔正、忠輔、行成、正光、三位親信、兼隆参入、行香了、申剋許退出」とある。

注18 「権記」寛弘二年十月に「十一日参衙、中宮御誂経結願、右頭中将藥次、公卿皆在殿上」とある。禁中と解してよからう。

注19 「権記」寛弘三年五月に「八日参左府、参内、中宮御誂経結願也」とある。禁中と解される。

注20 「権記」寛弘三年十一月に「廿七日参内、中宮御誂経結願也、有陣申文(略)」とある。禁中と解される。

注21 「御堂関白記」寛弘四年五月に「八日参内、著右仗座、中宮御誂経結願、共参入、(略)」とあり「権記」同日の記事に「召使来、告有陣定可参由、即參中宮御誂経結願、有陣定、(略)」とあるので禁中と解した。

注22 「御堂関白記」寛弘五年三月に「十七日参内入夜罷、女房同之、中宮御誂経初。」とある。

「日本紀略」寛弘五年四月に「十三日癸卯。子刻。中宮（彰子）自一条院一遷御上東門第一。御懷孕五月也。依レ為ニ神事之間ニ所ニ出御ニ也。」同年六月に「十四日癸卯。中宮（彰子）入三御内裏。令レ駕三牛車。」とある。（四月十三日に中宮土御門第出御、六月十四日入御内裏は、「御堂関白記」・「権記」にも見える。）中宮は三月十七日二十日はまだ禁中に在った。

註23

「権記」寛弘六年三月に「廿六日 参内、御説経結願、雖御物忌、外宿人候御前、（略）中宮御説経始也、又候彼所」とある。禁中と解してよからう。

註24

「御堂関白記」寛弘六年十二月に「廿日。庚子。（略）中宮御説経。并家季説経等初也。」「廿三日。癸卯。兩方説経結願。（略）」「権記」同十二月に「廿日、庚子、詣左府、参中宮、雨、御説経始也、（略）」「廿三日癸卯参左府、中宮并御説経結願也」とある。

「日本紀略」寛弘六年十一月に「廿五日丙子。辰時。中宮（彰子）於三左大臣（道長）上東門第一御三産第三皇子（敦良）一。」（「御堂関白記」・「権記」・「御産部類記」に同様の記載が見える。）同年十二月に「廿六日丙午。季御説経始。今夜。中宮自三左大臣上東門第二入三御枇杷皇居。」（「御堂関白記」権記にも同様のやや委しい記事が見られる。）この間中宮は御産の為里第に在った。

◎中宮季御説経は、第一表、第二表ともこれまでの分は全部天皇の季御説経の後に行なわれているが、この時初めて、先に行な

われている。里第で行なわれた為、宮中の先蹤に従わなかったものか。次の寛弘七年三月、寛弘八年三月、及び第一表の寛弘八年十二月の中宮御説経はいずれも天皇の季御説経の後に行なわれている。

註25

「権記」寛弘七年三月に「廿二日辛丑参内、朝講院源僧都、問朝晴、了参中宮、々々御説経始也、了亦参御前、（略）」とある。禁中（枇杷皇居）と解される。

註26

「権記」寛弘八年三月に「廿七日（略）着陣、（略）又中宮御説経、依大夫遲参未始行云々、大臣被奏云、早可令搥鐘、納言即起座参中宮催行、事了」とある。禁中で行なわれたこと明かである。

中宮が里第において季御説経を修した実際上の例は上に見た所では一条天皇の長保三年十月（二十一日発願、二十三日結願。中宮彰子。道長上東門第。）以前には見当たらない。その以後は皇子女御産のために里第に出御中に、中宮季御説経が里第で行なわれている（註27）のを見るが、長保三年十月の御説経は御産の為ではなくて、東三条院（註28）四十の賀に行啓のあった際のこと、唯一の異例である。源氏物語中に中宮季御説経は二例見えるが、二例とも御産の為の里第出御中でない。即ち実際の例としては唯一の異例であるところの、長保三年十月の中宮季御説経の場合に近い。

註27 (天皇) (年 月 日) (西暦) (事 項) (中宮名) (出 典) (里 第) (出御の理由)

一条	寛弘六、一二、二〇	1009	中宮御読経初	藤原彰子	御堂関白記・権記	左大臣(道長)上東門第	御産
"	"	二三	結願				
三条	長和二、六、一八	1013	中宮春季御読経初	藤原妍子	御堂関白記	"	"
"	"	一二、二一	中宮御読経結願	"	"	"	"
後一条	五、一二、一八	1016	"	"	"	"	"
"	長元元、一〇、一九	1036	中宮季御読経始	藤原威子	左経記	撰政(道長)高倉第 権中納言兼隆大 炊御門東洞院第	三条上皇 御所焼亡 御産
"	"	二二	寛	"	"		

(右表の里第と出御の理由とは「日本紀略」に拠る)

《構想と表現について》

構想と言葉の機能美 「胡蝶」の巻の中宮御読経のくだりは場面として構想されている。その場面の頂点は、

「南の御前の山際より漕ぎ出でてお前に出づる程、風吹きて瓶の桜すこしうち散りまがふ。いとうらかに晴れて、霞の間より立ち出でたるはいとあはれになまめきて見ゆ。」におかれている。

「漕ぎ出でて」はこの場合、中宮御殿の人々から見て童の乗った船が出現したという意味であるが、同時に、船が漕ぎ近づいて来る距離的・時間的経過が視覚的に表現されている。

「すこしうち散りまがう。」桜が僅かに散る。散る花は風にまが

い、池水にまがう。

「いとうらかに晴れて、」天候を云うのであるが、花木を一層華麗に見せ、庭全体の景観に情趣あらしめている具体性を読み取るべきだ。「霞」は上の句にも下の句にもかかる二重性を持つ。

「いとあはれになまめきて見ゆ。」霞の間から出現した迦陵頻伽と胡蝶は極楽世界から到来したかと錯覚させる。又、その捧げている花の見事さ。童舞は仮面をつけない、花を挿した天冠の下顔が人間の童子の顔を見ているのが、却ってこの世のものならぬ神秘的な生彩を匂い立たせる。堂上に居並ぶ列席者達は、優雅な参入者達の捧げ持つ花を見て、哀しい様な、時間が消滅してしまった様な不思議な美しさに陶酔する。中宮春季御読経発願の日にふさわしい華麗

な奇瑞だ。妙な仏の御国をまき目に見て、人々は心の深い奥処をゆすぶられて感動する。「あはれに」「なまめきて」「見ゆ」三語を一所に集めただけで、構想の成否を賭ける表現に成功した。

単語にこれだけの適確な強力な表現機能を發揮させる作者の能力は畏敬に価するであろう。それは根本的には永年に亘る、和哥による修練が生んだ、敏感な言語感覚の故である。その意味では作者一人の功とは云えないかも知れない。然し、今し現実と言葉の機能によって、それも日常的な単語に機能美を發揮させることによって、物語の一場面がここに創り出されている。美が、或る日の事件を描くところに生じているこの成果は作者のものである。

省筆 御説経の場面を描くに当って法会の進行次第を作者は一切描いていない。

高僧が大勢着席し、源氏をはじめ親王上達部殿上人が列席し、女房達の袖口が御簾の下からずらりと並ぶ中宮御殿の内部の有様を作者は書いていない。それらは従来の物語には重要な叙述対象であった。善美をつくした邸内の眺めにも作者は一行の文字をも割いて居ない。流れ漂う御説経の声、香のかおり、それさえ全く書いていない。然し、実際に存在しながら記述を省かれた上記の部分は、この場面から全く消滅し去ったのではない。それは、絵巻物の画面の霞の様な在り方で存在していて、読者の視界から外れた所で、艶美な雰囲気をも出し出している。然し文の表面には現われない。作者は中宮御説経に、紫上から奉られる花と供花の童と消息の往復と舞とど

けを書いた。そして、その美しさを読者が共感出来るところまで、十分に描いた。それは全体の中の一部である。然し、その尊さ、美しさに於て中宮御説経の盛儀全体と引換えに出来るだけの価値を文学的に付与されている。この場で読者に示そうと望んだものだけを描いて、作者はその他の部分はすべて惜し気もなく切り捨てた。その為描き出されている形象だけが極めて鮮麗な印象を読者に刻みつける。この場合省筆は表現上のトリックとして用いられたわけである。

作者が選んだ最高の部分は供花であった。作者は自発的な意志によって彼を捨て、これを選んだ。そして、原型的な「御説経」を超えたところに、想像力と言葉の機能を魔法の様に使いこなす手腕とによって、華麗な中宮春季御説経を文学的に築き上げた。その意味では省筆は選択である。作者は唯美を選んだ。そして、これが大切な点なのだが、作者は自ら選んだ対象に感情を注ぎつけているかの様だ。

加除 先に、われわれが見たところでは、「季御説経」は供花と舞楽を伴わない。紫式部は寛弘五年三月の彰子中宮の季御説経（上掲）を見ていたことと思われる。仮に源氏物語のこの部分が出仕以前に成立していたとしても、式部は季御説経の原型についての知識を多少に拘わらず有していたと推測される。というのは、この場合の鳥・蝶の供花と舞は「紫上の御志」として奉られたもので、中宮側の催しとして書かれていないからだ。作者は紫上の御殿の春

の花を、秋好中宮の春季御読経に奉ることを発想し、供花の方法として、本文に見る様な演出を虚構したのである。これに紫上の消息を、王卿の居並ぶ晴れの場で、夕霧が秋好中宮に奉る場面を加えて、昨秋以来の春秋の争いの結末を明かにしたものであろう。それにしても御読経の原型的部分を全く除いて、虚構による付加的部分だけを描いたのは何故か。勿論作者の美的姿勢の現われだと云えようが、場面の主題が花にあることを見落してはなるまい。「花奉らせ給ふ。」「同じき花の房厳しう、世になき匂をつくさせ給へり。」「瓶の桜すこしうち散り紛ふ。」「御階の下によりて花ども奉る」「閨伽に加へさせ給ふ。」「花園」「花に折れつつ」「鳥には桜の細長、蝶には山吹襲賜る。」「中将の君には藤の細長添へて」はみなそれぞれ主題へのアプローチだろう。

計算 演出の美的効果を高めるために作者は綿密な計算を立てている。

(1) 桜の「すこし散る」美しさに、最も適った時刻を考えて、御読経を「午の時ばかり」に始めたと思われる。始まる時刻が午の時であるために、供花、舞、賜禄がみな、美的に見て最も都合のよい時刻になる。

(2) 童の「容貌などことに整へ」童舞は仮面を用いないから、容貌が考慮されるのは当然だが、美童の神秘的な魅力が、この際、意表をついた出現の効果のきめ手になる。

(3) 童を船にのせて送り込んで、異郷からの使者がお供え物をもた

らしたといふ様な錯覚を起こさせることをねらった。
(4) 仏前の儀に童の出現のタイミングをびたりと合せた。この時点を外しては二者は結びつくことが出来ない。

(5) 文章に緩急が考えられている。上の「南の御前の」から「花に折れつつ聞えあへり。」までは筆運びが緩かで、舞に移って以後、俄かにピッチが速くなる。感興の中心が既に過ぎたからである。意外性の惹き起こした感興が場面の最後まで一貫して持続しているのは文全体の巧みな緩急の効果である。

小品

船ノ楽に与えられた紙幅と、御読経の場面のそれとの比は五対二の割合である。上記二つの場面が一对一の関係で並立しているのではないことは明かである。前者には、漢詩文を踏まえたペダンティックなまでに凝った修辞を用いて、園池と邸宅を仙境に見立て、遠景近景を描いて飽きない。場面を後宴に移して後も、門前に群がって聞き耳を立てる賤の男の表情まで描いている。宴にはめ込まれている蜷兵部卿ノ宮の玉璽への執心は、「玉璽ノ並び」の後々の展開につながるものである。一方後者は、物語の流れから見ると挿話的であり、描かれている場面も、いわばざわりだけを手際よくまとめた微量である。而かも興味の焦点は御読経そのものにあるのではなくて、上に見た通り春の御殿の「花」にある。つまり、御読経の場面は、船ノ楽の延長線の上に付随的な位置を与えられているのだ。一方が仙境、一方が極楽という演出で示された通り、二者は主従一体をなして六条ノ院の晩春を誇示する。実際の行事としては

中宮御読経は、船ノ楽よりも重大な催し事である。然し、作者は船ノ楽により多くの筆を割いた。源氏と紫ノ上の住む春の町に、「六条院の華麗な春」を見出そうとしたこの計算は、当然のことと云えよう。四季の時間がのどかに流れる、「少女」ノ巻から「藤裏葉」ノ巻に至る光源氏の栄華の一こま。「美」が作者の出発的でもあり窮極の目的でもある。計算も亦、美的必要が生んだものである。

換骨奪胎

「廿一日。甲辰。天晴。（略）入堂。講師登高座後。立捧物^{マツ}。僧下自階。王卿下從西対。列立之間。音声舟。於堂南散物声。從同廊下。融舟。二菩薩打一鼓。出從行道。廻中嶋三匝。後從南階。上達部。殿上人。仏前置捧物。諸大夫置庭中。此間樂舟來在松。二舟間舞臺（童ノ誤カ）來入中。此間舞童八人。取供華。至階下。僧八人受之供仏。此童等。退為鳥舞了。舞青海波廻了。後行舟。東相分。尚有声。舞童入綾不止。（後略）」（御堂関白記）

右は長保六年五月十九日から廿四日まで、左大臣道長が、故東三条院（詮子）の追善のために、自第で法華八講を修した時の五巻日の記事である。舟を用いた点、舞童が八人、供花を持って階下に至り、この場合は僧だが八人が受取って仏に供えた点、童達が鳥の舞を舞った点が、「胡蝶」ノ巻の御読経の場面と共通している。「胡蝶」ノ巻の中宮御読経は六条ノ院の栄光のために行なわれたかの如く見られる点で、長保三年十月の上東門第に於ける中宮彰子の季御読経と似ている。作者は左大臣道長第で行なわれたこの二つの盛事を結び

つけて、「胡蝶」ノ巻の中宮御読経の場面を構想したものかと考えられる。

道長は早くから私第で行なう自家の読経を「御堂関白記」中に「季ノ読経」と記している。即ち次の通りである。

長保元、関三、二	寛弘二、一二、二〇
六、四、二九	三、四、二三
一〇、二二	一、二、一五
一〇、二九	五、三、二〇
三、二五	九、二八

自家の栄華の象徴としての読経、それはもはや仏を崇めるわざでも、仏に祈ることでもない。仏の教えを知る為ですらない。何十口の名僧を招いても、親王、大臣達が悉く列席しても、道長の季読経の場合その敬虔や荘嚴は、実は、儀式化した装飾に過ぎない。それは信仰の仮面をつけた過誤である。

六条ノ院に於ける中宮御読経は、本体を作者が描かなかった為此の種の過誤から免かれている。信仰の本質的な部分は霞の中にかくれて、いさかも傷つけられていない。秋好中宮は、予め公私混同の責めを免ぜられている。描かれているのは紫上の奉った花と、それにふさわしく華麗な奇瑞を演出した企画とであった。上に見た道長的な二つの素材からの見事な換骨奪胎。そこにわれわれは作者の手腕だけでなく、作者の精神の清さをも読み取ることが出来る。

注28 引用した源氏物語の本文は朝日新聞社刊日本古典全書「源氏物語」によった。